

早稲田大学會津八一記念博物館所蔵 「松枝茂夫旧蔵書簡」 解題

飯倉照平・小川利康

論文摘要：松枝茂夫先生（1905-1995）身后留下大量書簡。當中不只有中國文學研究會同人的書簡，還有一些著名日本、中國、台灣作家的書簡。我相信這些書簡對日中台文學研究上有一定的資料價值。最早時期由飯倉照平整理部分書簡，並作為參考資料在編撰《竹內好全集》（筑摩書房 1980～82 年）過程中參照過。近年來周作人的書簡部分由止庵、著者整理出版《周作人致松枝茂夫手札》（廣西師範大學出版社 2013 年）。但其他很多零散的書簡至今沒有整理過。2018 年 3 月松枝茂夫之令嗣松枝到先生（和光大學教授）來聯繫，松枝茂夫故居即將拆除，希望早稻田大學保管重要文物。經過整理之後，征得松枝到先生的同意，松枝茂夫舊藏之書簡以及周作人、沈從文等著名作家的字畫捐贈給早稻田大學會津八一紀念博物館了。在此由衷表示感謝。為了方便有關研究工作者的必要，我們在此發表《松枝茂夫所藏書簡》的說明以及目錄。

关键词：松枝茂夫；松枝到；會津八一紀念博物館；中國文學研究會；

はじめに

松枝茂夫（1905-1995）は大量の書簡を没後遺された。そのなかには中國文學研究會同人の書簡だけでなく、日本、中國、台灣の著名作家からの書簡も含

まれており、編者は日本、中国、台湾文学研究において一定の資料価値を持つと考えている。最も早くは飯倉照平先生（東京都立大学名誉教授）が一部の書簡を整理して『竹内好全集』（筑摩書房 1980～82年）編纂の際に参照し、一部は雑誌『辺境』に発表したことがある（後述）。近年では周作人の書簡の部分を止庵と著者が整理して『周作人致松枝茂夫手札』（広西師範大学出版社 2013年）を刊行し、文字翻刻版としては本誌に4回にわたって連載した¹。しかし、その他の零墨断簡は今日まで整理する機会がなかった。

2018年3月、松枝茂夫のご子息松枝到先生（和光大学教授）から松枝茂夫旧宅が取り壊しを予定しているため、重要な文物書籍については早稲田大学で預かって欲しいとの依頼をいただいた。お預かりした文物については大まかな整理を行った後、先生の同意を得て、早稲田大学會津八一記念博物館に寄贈された。ここに心よりお礼を申し上げたい。受贈品は、書簡の他に軸装された書作品6点（周作人揮毫の書2点、沈從文揮毫の書3点、硯波揮毫の書1点）と松枝茂夫日記全25冊（1953年から1991年まで断続的に執筆されたもの）が含まれる。なお、周作人の書作品の詳細は下記の通り。

「苦茶庵打油詩其四」 紙本墨書・軸装 50.8×18.8cm 己卯（1939年）筆

「苦茶庵打油詩補遺其七」 紙本墨書・軸装 50.8×18.9cm 壬午（1942年）筆

それぞれ詩文の後に、「松枝君雅属 知堂」「松枝先生雅教 作人」と記されている。このご厚意に報い、そして関係する研究者の閲覧利用の便宜を図るため、ここに會津八一記念博物館所蔵「松枝茂夫旧蔵書簡」解題及び目録を掲載することにした。

書簡全般に関する解題については、松枝茂夫旧蔵書簡との関わりが最も深い

1 小川利康編「周作人・松枝茂夫往来書簡戦前篇（1）（2）（3）・戦後篇」（『文化論集』第30～33号、2007年3、9月、2008年3、9月）。

飯倉照平先生より5月20日にご寄稿いただいたが、7月24日に逝去された。ここに生前のご指導に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りする。飯倉先生が執筆された中国文学研究会関連の人物以外については、小川が担当した。

「松枝茂夫旧蔵書簡目録」作成にあたっては、會津八一記念博物館助手であった徳泉さち先生（当時）を中心として館を挙げて資料撮影及び書簡発信者氏名、発信日時のデータ入力に取り組んでくださった。小川は完成したデータを参照しながら書簡発信者の来歴について初歩的の考証を行ったが、膨大な書簡に番号をつけて撮影するという作業なくして目録作成は不可能であり、その労に心よりお礼申し上げる。

本学の中村みどり先生には陶晶孫の研究者として、関連書簡についての翻刻と解題をお願いした。戦時中に国策とは異なる文脈で築かれた日中文化人のつながりを葉書の短い文面から丁寧に読み取った論考を寄稿していただけたのは望外の喜びである。松枝茂夫所蔵書簡の多くは通信内容が検閲される時代に交わされたものであり、片言隻句といえども、そこに託された万感の思いを私たちは今日改めて汲み取らねばならない。

最後に東京都立大学時代の松枝茂夫を知悉する方として、杉本達夫先生（早稲田大学名誉教授）に当時の思い出を執筆していただいた。先生は大阪外国語大学中国語学科卒業後、1959年4月に東京都立大学大学院に入学してから同大学助手を退任する1966年3月まで松枝茂夫と家族ぐるみのお付き合いがあった。当時の雰囲気伝える貴重な追想をご一読いただければ幸いである。（小川利康、以下執筆担当者を項目ごとに記す）

解題：中国文学研究会に係わった人々との交流

戦前、戦中、戦後にわたって、松枝茂夫のもとに保存され、ここに残されていた書簡のうち、とくに目につくのは、生活上の庇護を受けた人たちからの来簡である。

なかでも数が多いのは、文求堂主人田中慶太郎からのものである。松枝自身が書いているところによると、東大在学中に書いた「中国文壇をのぞく」という文章が機縁となって田中に認められ、「その後、十数年、私の最も貧乏していた時代に、大変なお世話（金銭的な）を受けるキッカケになった。それはあとの話ですが、郭沫若も、その頃、文求堂から援助を受けていて、よく店で顔をあわせ、三人一緒に浅草へエノケンを見に行ったことがあります²」という。

それに見合うかのように、松枝は神谷衡平との共著で、『現代支那趣味文選』（1934年）と『現代支那白話趣味文選』（1935年）を文求堂から出しているし、さらに長期間かかって『学生字典』（上海商務印書館、1915年）の翻訳を引き受け、1940年に『支那文を読む為の漢字典』と改題して文求堂から出している（この字典は戦後も書籍文物流通会や山本書店から増刷された）。

田中については、のちに三男の壮吉が、郭沫若の書簡などを集めた『「文求堂」主人田中慶太郎』という本を出しているが、それに寄せた文章のなかで、長澤規矩也が書いているところによると、東京の哲文学界の先生方が敬遠しているなかにあつて、「（田中は）特に中国文学研究会同人のシンパであった。松枝茂夫君の学問を買い、『学生字典』の翻訳を依頼した。増田渉君は主人、震ちゃん、脇本先生などの将棋のお相手をしていたこともあった。竹内好君も愛されていた³」という。

竹内好は、東大文学部の支那文を卒業した1934年3月に、中国文学研究会を発足させ、同年8月に来日中の周作人と徐祖正の歓迎会で、はじめて会の名を用いた。この会には松枝も出席したが、当日は直接話をかわすには至らず、松枝が北京の周作人に直接手紙を書くのは1936年3月以後のことであった。

中国文学研究会を発足させたさいに、竹内らは、1929年に東大の支那文を

2 「中国文学と私」、『松枝茂夫文集』第2巻

3 （小川利康補記）長澤規矩也「古書店主とのつきあい」、『日中友好的先駆者「文求堂」主人田中慶太郎』別冊（1987年初版、1991年初版2次印刷発行、非売品）なお、「震ちゃん」は次子の田中震二（1911-1936）、「脇本先生」は脇本楽之軒（美術史家、1883-1963）を指す。

出た増田渉（1903年生）と、その一年後に支那文を出た松枝（1905年生）とを先輩格で迎えている。増田はすでに上海で1931年に直接魯迅から、その著作、とくに『中国小説史略』についての講義を受けており、当時はその翻訳と校正にたずさわっていた。松枝は、その仕事を手伝いながら、親しく往来するようになっていた。増田からの来簡は、住まいが近く、日常的に往来する機会が多かったせいもあって少ないのだろうが、以前に調べたさいにはもう少し残っていたと思う。

竹内からの来簡も、なぜかここには少数しか保存されていないが、竹内の没後まもなく松枝から借り出して、飯倉が整理して雑誌に掲載したものによると、1937年から松枝が都立大に赴任する1952年までの分で百余通に及んでおり、竹内の公表された書簡では、松枝あてのものももっとも多い⁴。

ほかに中国文学研究会の仲間からの来簡では、小野忍からのものが目立って多く残されている。小野忍は、1929年に東大の支那文を出たあと、1934年に富山房に入社して百科事典の編集にたずさわり、松枝に中国現代文学の項目についての執筆を依頼してきたのが交際のはじまりであった。松枝は、小野に案内されて増田と三人で幸田露伴のお宅を訪問したこともあるという⁵。その後、1937年に竹内が北京に留学し、武田が応召して、東京に残っていた松枝が、『中国文学月報』の編集を引き受けざるを得なくなった時、松枝は小野に正式に同人になってもらい、その助力を求めた。そして1940年に小野が満鉄に入社して上海に渡ってから、二人の交友はつづいた。ここに残された来簡は1935年から1952年にわたっていて、田中と並んで、もっとも多数を占めている。

さらに中国文学研究会の関係では、武田泰淳、飯塚朗、岡崎俊夫、千田九一、実藤恵秀、斎藤秋男らも、戦中から戦後にかけての来簡が残されている。

目加田誠も、1929年に東大の支那文を出ているが、1938年に三高教授を経

4 「竹内好の手紙」『辺境』5号～6号、記録社発行・影書房発売、1987年10月、1988年1月

5 「小野忍さんを弔う」、『松枝茂夫文集』第2巻

て九州大学教授となっていた。その翌年の1939年から九州大学に赴任して、はじめて安定した生活に入ることができた松枝は、大いに目加田の恩義を感じていたようである。目加田からの来簡は、1937年に始まり、松枝が東京に出た戦後の時期にまで及んでいる。

倉石武四郎は、1921年に東大を出たあと、京都大とのかかわりも深く、兼任していた時期もあったが、松枝の1947年から翌年にかけての短期間の東大赴任とかかわりがあったと思われる。周作人（周遐壽）の『魯迅の故家』（筑摩書房、1995年）を松枝と共訳した今村与志雄との往来も、この時期にはじまっている。

なお、松枝は1952年から東京都立大学に赴任するが、そのさいにかかわったのが永島栄一郎であった。永島は、1936年に東大文学部の言語学科を卒業していて、戦中の北京で竹内らと往来があった。戦後は、1950年に東京都立大学に赴任し、その後の松枝、竹内（1953年赴任）らの招請に力をつくした。

橋川時雄は、松枝が大学を出た直後に、北京で東方文化事業総委員会の仕事をしていた世話になった⁶。さらに、都立大赴任後三年目に新居を建設したさいの敷地の一部を提供していただき、のちには隣人として暮らすことになった。

このような生活上のかかわりをもった人々のほかに、下村湖人、青木正児のような敬愛をこめた回想を綴っている方々（『松枝茂夫文集』第2巻）や、『中国文学月報』34号後記で、松枝がその急死を悼んだ松井秀吉の来簡もある。松井は松枝と同年に支那文を出て、奉天で中学の教師をしていた。

なお、『魯迅伝』（筑摩書房、1941年）の著者である小田嶽夫や、戦中に多くの随筆集を出していた奥野信太郎、京都大の吉川幸次郎からの来簡も見られる。（飯倉照平）

日本人に関する解題は以上だが、佐藤春夫について解題を追加する。わずか

6 「橋川時雄先生のこと——龍のごときか」『松枝茂夫文集』第2巻

一通ながら 1950 年に來簡がある。詩人、小説家として周知の存在であるが、中国文学との縁も浅からぬものがあった。その筆頭には増田渉との共訳で刊行した『魯迅選集』（岩波文庫 1935 年）を挙げねばならない。魯迅の存在をひろく日本に知らしめた功績は大なるものがある⁷。松枝も増田渉を介して、佐藤と交流があった。書簡は佐藤が戦後まだ長野県佐久に疎開していた時期に書かれたもので、松枝夫人の逝去を悼みつつ、『紅樓夢』（岩波文庫 1950 年）全訳刊行を祝賀している。（小川利康）

解題：中国、台湾の作家、学者との交流

中国人のなかでは、楊友濂（雲萍）は、三崎町にあった中国留日会館にあった中国書の店で学生時代に知りあった台湾出身の学生で、來簡は 1930 年からはじまっている⁸。（飯倉照平）

曹欽源は台北高等学校卒業後、東京帝大に入学し、1933 年に支那哲を卒業すると、京北商業、東洋大学などで講師を務めるかわら、中国文学研究会に参加した。日本敗戦後は台湾大学で台湾語研究に従事した。來簡は 1941 年のみだが、交流はさらに早い時期から始まっていたはずだ。

若き日の松枝茂夫はエスペランティストであり、エスペラントで綴られた書簡も残されている。その一人が陳兆瑛であった。福岡高校在学中に文通した陳兆瑛を通して中国の新刊書を手に入れて読んだことが中国文学を志すきっかけとなったという⁹。陳兆瑛は中国人エスペランティストの先駆的存在で、胡愈之、巴金らとともに上海の世界語学会設立に参画している。

Ernst Wolff は、アメリカの中国文学者で、著書に *Chou Tso-je*n (New

7 藤井省三『魯迅と日本文学』（東京大学出版会 2015 年）第 5 章「魯迅と佐藤春夫」、秋吉收『魯迅 野草と雑草』（九州大学出版会 2016 年）第 8 章「佐藤春夫」

8 （小川利康補記）楊友濂は、周金波（1920-1996）とともに第二回大東亜文学者大会に参加した詩人、小説家である。日本敗戦後は台湾大学歴史学系で台湾史、台湾文化の研究に尽力した。

9 「中国文学と私」及び「聞書 紹興、魯迅、そして周作人」、『松枝茂夫文集』第 2 巻

York, Twayne Publishers, 1971)¹⁰がある。書簡によれば、Ernstは1967年に来日して松枝を訪問したという。文中、懇切なる指教に感謝する旨、綴られており、二人が長時間にわたって面談したことを窺わせる。

方紀生は、周作人に師事した作家、民俗学者である。許地山の紹介で周作人邸の文学サロンに出入りするようになり、文学と民俗学に興味を持つようになった¹¹。1931年からの日本留学を経て、一度帰国して中国で教壇に立つが、1940年8月には駐日弁理留学生事務専員として日本を再び訪れ、この期間に日本の作家と多く交流した。還暦を祝って刊行した『周作人先生の事』（光風館1944年）には日本の作家が多数寄稿しており、編集責任者をつとめた方紀生の人脈の広さを示している。

沈従文は、「辺城」（1934年）など田舎町の純朴な恋愛を描いた小説で知られる。中華人民共和国成立後は政治的批判を受けたために、筆を折り、故宫博物館で古代服飾史研究に従事した。松枝茂夫は「辺城」を戦前にいち早く邦訳して紹介した¹²。沈従文は書簡で先駆的な翻訳の労に感謝し、文革後の近況を伝えている。

孫伯醇は、日本留学より帰国後、1924年より中華民国外務省に勤務し、1930年には駐日公使館二等書記官として再来日した。爾後日本に止まり、戦後は日本の大学で教鞭を執り、中国語、中国古典文学を講じ、多くの後進を育てた。また学究のかたわら詩や書画も能くし、松枝宛の葉書にも見事な文人画を残している。

陶晶孫は、日本で生まれ、九州帝大医学部卒業までの大部分の学校教育を日本で受けた。郭沫若に誘われて、1921年の創造社創設から参画し、作家として世に出た。1929年帰国後は医業のかたわら創作活動を続けた。日本敗戦後

10 書名はウェード式綴りで周作人を意味する。

11 川辺比奈・鳥谷まゆみ「方紀生のこと」、『野草』98号、2016年

12 『辺城』（改造社、大陸文学叢書7、1938年）

は台湾に渡るも1950年には日本へ移り、ほどなく1952年に病没した。

王古魯は、1920年に日本に留学し、東京高等師範学校で学ぶ。帰国後は北京女子師範大学などの教授を歴任した後、1938年再び来日し、古籍版本の調査を行い、帰国後は周作人のもとで北京大学図書館秘書主任を務めた。

王秋琳は、松井秀吉から紹介を受け、1936年来日当初、松枝が自宅に招いて歓待したことがあった。書簡ではその際の歓待に礼を述べている。王秋琳の生没年が今日分かるのは「血統論」を文革中に発表して処刑された遇羅克(1942-1970)の母であるためだ。夫の遇崇基(1915-1988)は早稲田大学に学んだ留学生で、二人は留学中に知り合ったという。

尤炳圻は、北京師範大学で中国文学、清華大学で英国文学を学んだ後、1934年より東京帝大で日本文学と英国文学を学んだ。帰国後は北京大学で日本文学を講じ、夏目漱石『吾輩は猫である』を翻訳している。第一回大東亜文学者大会(1942年)には錢稻孫、張我軍とともに参加した。

鄭子瑜は、シンガポール在住の中国古典文学者。1958年に周作人に黄遵憲『日本雜事詩』について問い合わせたところから文通が始まり、さらに周を介して、さねとうけいしゅう、松枝茂夫とも文通が始まった。1964年4月から9ヶ月間にわたり、鄭は早稲田大学語学教育研究所の客員教授として在籍し、さねとうけいしゅうとともに大河内文書(黄遵憲と大河内輝声との筆談録)の整理校訂を行ったという¹³。

鍾敬文は、青年時代から民間文学に関心を寄せ、収集した歌謡を文芸誌に投稿するなかで自ら詩作を始めた。1928年には杭州で中国民俗学会を発足させ、研究に打ち込む。1934年には来日して早稲田大学文学部で2年間学んだこともある。中華人民共和国成立後の来簡当時は、北京師範大学で民俗学を主導する立場にあった。(小川利康)

13 「在早大的一年」、『鄭子瑜墨緣錄』作家出版社1993年